

平成二十七年八月十日発行
皇學館論叢第四十八卷第四号
抜刷

文学部の文明史的意義について

塩
村
耕

文学部の文明史的意義について

塩村 耕

この十五年間、愛知県西尾市にあります古典籍の一大宝庫、岩瀬文庫（図版1）の悉皆調査と詳細な書誌データベース（以下、DB）の作成公開という仕事に没頭しております。「月月火水木金金」ではありませんが、校務以外、ほぼ全ての日々は文庫にお籠もりを続けています。私は生来怠け者で、今日は一寸休みにしようだとか、岩瀬の仕事の傍らで、別の研究のための調べ物をしようだとか、普通の研究者のやり方で調査をしていたのでは、ずるずると頓挫してしまいそうなので、その間は他事をすべて放擲し、浮世の義理も欠き続けてきました。ただ、そうやって打ち込んでみると、昔の人の教えに触れる機会が多く、大げさに言えば、人生観が変わりました。今日はそんなことの一端をお伝え出来れば、と思っております。

岩瀬文庫については、今年の三月に出た『愛知県史 別編 文化財4 典籍』——典籍だけで一冊を成すという、一寸珍しい県史です——の中で、現段階で知り得た全てのことを記しておりますので、詳しくはそちらを御参照下

さい。要するに、岩瀬弥助（一八六七～一九三〇）という西尾の一人が、書籍こそが最も大切な文化遺産であることを看破し、その永久保存を期して拵えたという、高邁な志に支えられた私設図書館に由来します。古典籍の蔵書の総数は従来一万八千タイトルと言われていたのが、既に二万タイトルの調査入力を済ませたのに、まだ先が見えてきません。そういう畏るべき文庫です。

たとえば、神宮関係では、外宮の一祿宜を務め、明治には華族ともなった松木家という最も家格の高いお家の旧蔵資料がまとまって岩瀬文庫にあります。これはあまり広く知られていない事実かもしれません。今後は、書誌DBによって、その旧蔵書はじめ神宮関係の資料を瞬時に検索出来ますので、是非活用していただきたいと願っています。

それから、名古屋大学には、御存じの通り、こちらの大学と御縁の深い神宮皇学館文庫という古典籍の蔵書群があります。来田家^{きた}という外宮の御師^{おんし}の旧蔵書を中核としており、特に連歌書や伊勢物語関係などの国文学書や、やはり神宮関係の分野に珍しい資料の多いユニークな文庫です。岩瀬文庫に先立ち、この文庫について、従来日本ではなかったような記述的書誌DBを初めて作り、名古屋大学附属図書館のホームページから公開しています。そういう詳しい書誌DBを思い立ったのは、本来伊勢にあるべき文庫が、不思議の因縁で尾張にあるわけですから、それを最大限に活用するのが書物を残してくれた先人に対する責務だと考えたからです。ただ



図版 1

し、岩瀬文庫の調査が大仕事なので、こちらの方の調査は手薄にせざるを得ず、まだ完成できずにあります。

伊勢の御師というのは、宗教信仰史以外にも、文化史的に見てたいそう面白い人たちで、一言で申せば、身分や地域の上で境界的な存在で、広く国民の中に浸透して文化的に大きな影響を与えました。近い将来に神宮皇学館文庫のDBを完成させるとともに、御師についての研究も再開させたいと考えております。以上、自己紹介かたがた、私と伊勢とのかかわりを述べました。

さて、そんな岩瀬文庫でつい最近、こんな本を読みました。江戸時代後期の神道家、玉田永教ながのりの『神道柱立』という通俗な神道書です。寛政四年（一七九二）のこと、泉州日根郡鳥取郷大宮八幡——いまの大阪府阪南市石田にある波太神社のことです——で講義の折、土地の素封家に三百年前の手形（借金の証文）を見せて貰ったそうです。三百年前というのは十五世紀の末、戦国時代でしょうね。文書の前半は通常の借金の文言。ところが奥書には、

銀子返済、切月きりつき相延候得者、御笑可被成候

とあったそうです。玉田氏はこれを見て、「今此天下泰平に借財出入りの一件を公儀へ訴へたる事多し。彼の三百年前の乱世に、右の文言こそ感ずべきの事ならずや」と、いたく感心しています。

似たような話を以前に読んだとおぼろげな記憶があり、こういう時に書誌DBを拵えておくと実に便利で、すぐに判明します。それは岩瀬文庫にある『机の塵』という全八十三巻もの雑記随筆でした。幕末明治期を生きた和田了吉という大坂のお金持ちで、筆まめな好古家の書き残したものです。こんな大部の資料であろうと、何日もかけて全部に目を通して、DBに内容を略記するわけですから——しかも一タイトルしか進まない——、苦勞をお察し下さい。…と申したのは嘘で、こういう作業が実に楽しい（笑）。冒頭で私の日常を「月月火水木金金」と言っていました。

あれも嘘で、本当は「月火水日日日」なのです（笑）。『机の塵』の第六冊に、珍しい資料として万治三年（一六六〇）の借金の証文が引用してありました。その文面は、

借請申銀子之事

一、銀百五拾目也

右之銀子儘に預り申候。万一此銀子返済致し不申候はゞ、

人中におゐて御笑被成候共、其節、一言之申分無之候。

依而如件

万治三年子五月 佐野屋喜兵衛印

播磨屋嘉兵衛殿

というもの。筆者はこれに対して「…今大坂繁昌に付ては、次第に人家も増、金銀貸借の出入も夥しく、自然と事むつかしく成り候事と見へたり」と、玉田氏と似たような、良い感慨を漏らしています。

いきなりで恐縮ですが、本日の結論を申し上げます。

われわれは通常、新イコール善・優、旧イコール悪・劣と思いがちですね。パソコンが典型であるように、多くの商品がそうだからです。ところが、先ほどの例を見るとわかるように、人間というのは、自然の流れのままに放っておいたら、悪くなってゆく傾向がある。

少し卑近な例を申せば、私は兵庫県の神戸の出身で、神戸の町はすべて斜面の上にあります。私が子どもの頃、年寄が荷物を持ったたり、母親が小さい子を連れて坂道を歩いていると、見知らぬ人がしばしば自動車を止めて乗せてく

れました。ところが昭和四十年代に、関東の方で大久保某という殺人鬼が現れ、若い娘さんを愛車のスポーツカーに乗せては、次々と殺してしまおうという事件が起きて世の中を震撼させました。それ以来、知らない人の車には乗らない、乗せない、ということになって、そういう親切的な行為も跡を絶ちました。こんな風に、たまに不心得な者、悪人の出てくることは避けがたいことで、そうすると、その悪が基準になって、その後の世の中が段々窮屈になってくるという原理です。

それから学問や科学技術、社会のシステムは基本的に進歩し、それにともない、生活は便利になり、人間の労力は軽減されます。さらに、主に金儲けのために、さまざまな手軽な娯楽が提供されます。それらがまた、人間を墮落させる契機ともなる。たとえば、刀剣や焼き物、漆器などの工芸美術品を見れば一目瞭然、古い物はほとんど一方的に優れており、後世の者はなかなか巻き返せない。たまに天才的な名手が出現しても、全体的な傾向は覆せない。あるいは、子どもの時の遊びを見ても、われわれのように野山をかけずり回っていた者と、ゲームばかりやって育った世代とは、若い諸君には申し訳ないが、基本的な人間力に差があるように見受けられる。

そもそも現代の邪悪は、いま生きている人の都合だけを絶対視することにあります。それは、たとえば医療によって、ほとんどの死を回避できるかのように語る言説と同様、ゆがんだ死生観に由来しています。そして、過去を生きた人、つまり死者の人権は無視されているといって過言ではない。たとえば、昔の人が聞いたら卒倒するような地名に、平気で改変したりする。

何よりも問題なのは、過去を重んじない者に、未来を重んずるなど、絶対に不可能であるということです。いくら口でそう言おうとも信用出来ません。その結果、子孫にツケを回す巨大な赤字政策や、たとえ纒かな可能性であっても、取り返しの付かない無限大のリスクを含んだ原発再稼働が行われるわけです。過去を大切にすることは、実は明

るい未来を作り上げるために不可欠な態度なのです。

どうも人間そのものは、時代とともに退化しやすい。基本的にそう考えるのが「人文学的」なものの方なのでないでしょうか。そして、死者との対話により得た知見を通して、自然退化を何とか少しでもくいとめることこそが、人文学の文明的任務、つまり文学部の仕事なのだと思います。

このような意味で、文学部は「文明劣化防衛隊」であり、その社会的な存在意義は、決して小さくはありません。それなのに、現在、文科省は国立大学から文学部を縮小ないし別組織に転換させようと誘導しています。それは国立大だけの問題ではない。この誤った政策は私学を含む文学部への逆風を加速させ、それが齎す人文学の衰退は国の潜在力を削ぎ、日本を三流国以下に貶める結果となるでしょう。

本日の演題について、私の申し上げたい話は、以上で尽きております。ただ、人文学の研究や教育の意義について考える際に、いつも私の頭をよぎるのは、大好きな雨森芳洲のことですので、その話をしたいと思えます。

これ(図版2-3)は雨森芳洲(二六六八-一七五五)の手紙です。近世前中期を生きた対馬藩の儒学者で、朝鮮との外交の現場で活躍した、日本では珍しい実践的な文人です。一寸だけ自慢をしますと、雨森芳洲の手紙は稀少なのですが、現存する四十数通のうち三十数通は私の所にあります。若い時に苦心して手に入れました。その多くは、天龍寺の桂洲道倫(一七一四-一八四)宛てで、これもそうです。桂洲さんは小僧だった十三歳から十五歳まで、師匠について対馬の以酌庵に滞在しており、その間芳洲に会っていたようです。以酌庵というのは、対馬厳原に置かれた特殊な禅寺で、幕府により京都五山の碩学の禅僧が二・三年交替の輪番で派遣され、対馬藩と朝鮮との文書のやりとりを監査しました。

この手紙は元文三年（一七三八）、芳洲先生が七十一歳、桂洲さんが二十五歳の時のもの。この年、十年ぶり桂洲が再び対馬にやって来て、手紙と漢詩を芳洲に送った、それに対する返事がこの手紙です。折角だから一寸読んでみましょう。闊達を極めた、素晴らしい筆蹟でしょう。

御使殊ニ御佳作被送下、数遍吟詠仕、不堪欽服候。「月満夷江」一聯、別而御奇想と奉存候。貴所様、先年当地へ被成御座、いまだ御幼齡之内ニ被成候へども、御詩作甚御秀逸ニ相見え候故、他日必御詩名可有之候と其節申たる事ニ御座候キ。若ハ御覚も被成候哉。其後京師之事を存出候節ハ、毎度貴所様御作、何ほどニ御上達被成候哉、弥才を御成し被成候哉否と、必ハ存出し罷在候処、誠に御手跡与申、御佳作と申、無残所御事ニ奉存候。老拙眼力も違不申哉とよほど自満ご、ろニ罷成、不堪爽快御事ニ御座候。：

桂洲から貰った漢詩やその筆蹟が素晴らしいこと、そして桂洲のことをよく覚えていたことが具体的に書かれています。相手の漢詩のどこが素晴らしいのか、根拠が書いてあって、人を褒める時にはこうでないといけません。若者を励ますツボを心得た手紙ですね。天下に雷名の轟く老大儒に、こんな風に言われて、桂洲さんもどんなにか嬉しかったことでしょう。この後、桂洲は芳洲に本格的に唐音（中国語の会話）を習うようになります。口語を含むために難解な中国人の禅語録を研究するためです。ずっと後年、桂洲さんは、その方面の学僧として大成します。また、有名な伊藤若冲の描いた名品「鶏頭に蠅螂図」や「河豚図」に着賛していることからわかるように、晩年には書の方でも評価の高い文人でもありました。そんな風な実りの多い人生を歩むに至るきっかけとなったのが、まさにこの書簡だったはずですよ。

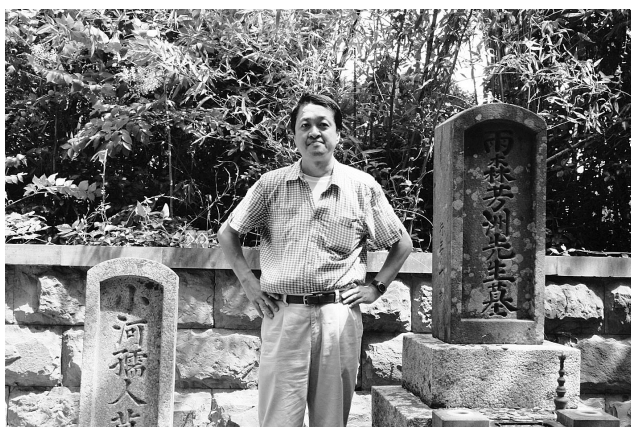
芳洲先生は、こんなお顔です（図版4）。目の周り、口の周りに刻み込まれた深い皺が、表情豊かに日々を過ごしてきた、温かい人柄を物語っています。日本の近世の肖像画を代表する名品だと思います。つまり、優れた人間性が活写されている。将来、紙幣が改定される際には、是非とも、この肖像を取り上げるべきだと僕は強く主張するのですが、賛同して下さいますか。一国を代表するに最も相応しいのは、知性に裏打ちされた、こういう良いお顔です。お髭があるから偽造されにくいしね（笑）。

数年前の夏に対馬へ初めて渡り、芳洲先生御夫妻と一緒にスナップ写真を撮ってきました（図版5）。ここは回りが竹藪で、ものすごい蚊に閉口しました。「対州の蚊の喰らひけり妻が脛むね 耕山人」という句が出来たくらいです（笑）。右側が芳洲先生、左側の「小川孺人」——もちろん江戸時代には夫婦別姓でした——が奥さんです。芳洲先生が八十八歳で亡くなった二年後に、奥さんも亡くなっています。偕老同穴を絵に描いたような御夫婦ですね。死んだ人に直接会うことは叶わず、せいぜいこんな写真を撮ることしか出来ないのですけれども、われわれは残された書簡資料や著述を読み込むことによって、その人間性に直接迫ることは十分に可能なのです。それこそが人文学の力だと思えます。

少し話を脱線させて下さい。この時の対馬旅行では、妻と二人でレンタカーを駆使して、島内の神社をいくつもお詣りして来ました。そして神道について考えました。御存じのように、対馬には素晴らしい神社が数々あります。たとえばこれは和多都美神社（渡海大明神）という所です（図版6）。こちらは海の方、干潟の上から撮影した神社の森で（図版7）、神社のおかげで太古の豊かな景観が残されています。こういうのが、本来の神社の姿だったのではないかな、と直観的にそう感じました。



图版 4



图版 5



図版 6



図版 7

ところで、「森」と「林」とはどう違うのか、外国の人に尋ねられると、皆さんならどう答えますか。『日本国語大辞典』を見ても、しかとした説明は書いてありません。岩瀬文庫で見た『地方要集録』^{じか}という写本に次のように書いてありました。

森と言は、寺社等之境内等に、木を植立置、茂りて材木薪にも伐取らず立置候を言。林と言は、何方に而も、山川原か原等に、木を植立置候て、材木薪にも伐り候木立茂りたるを林と言也。

何とも明快な説明ではありませんか。人間の用途に供するのが「林」、そうじゃなくて、神仏のためにあるのが「森」だということです。そこから、古く「社」の字を「もり」と訓ませたことも思い合われますね。

先ほど、ここに来る前に外宮にお詣りして来ました。お伊勢さんはまことにめでたい所で、林立する巨木を見るだけで、気持ちが一とします。御存じの通り、太古の昔から、この木は枝一本も伐ることなく、大切に守られてきました。たぶん材木屋さんに持つて行ったら、一本が何千万（？）もするのではと思いますが、カネに替えたりせず、朽ちるに任されました。つまり、人間の都合は度外視されているのです。

つくづく思うのですが、神道というのは、現在生きている人の都合ばかりを考えてはいけませんという、まさに神の智慧でもあるのではないのでしょうか。良い神社に行くと、そういうことがわかるような仕掛になっている。そういう意味で、文学部と通うものがあるように思うのですが、いかがでしょう。しかし、このような場で神道について語るとは、我ながらたいそう心臓の強いことで（笑）、素人の妄言とお許し下さい。

雨森芳洲に話を戻します。実はこの時の旅でもう一人会いたい人がありました。それがこの方です（図版8）。芳洲先生の次男で、同僚だった松浦家の養子に入った松浦龍岡の子、つまり芳洲の孫の松浦桂川^{けいせん}（一七三七〜九二）です。

この方は幼い頃、父上が仕事で不在がちだったことから、老芳洲の膝下で育ちました。芳洲は、別の桂洲宛書簡の中で当時十歳だった桂川さんについて、

文平（桂川のこと）ハ文字ノ方、勝^{すぐれ}而器用ニ有之、何とぞ息災ニ而、材を成候様ニと存候。

と語っています。念のために申しますが、芳洲先生は、そこら辺のお祖父さんのように、孫かわいさに、こんなことを言っているわけではありません。現に嫡孫の連という少年については、勉強嫌いで見込みがないと、手紙の中で手厳しい評価を下しています。そんな芳洲のお眼鏡にかなった桂川さんは、よほど優秀な子だったに違いないのです。

この方の学識の高さは、その書を見たら一目瞭然です。芳洲の主著の一つである、漢文体の芳洲語録『橘窓茶話』の最善本は、近江の芳洲書院にある松浦桂川書写本（『雨森芳洲全書』に影印が所収）なのですが、ゆつたりと記された端正な楷書は、まるで朝鮮人かと思わせるような、日本人離れをした見事さです。祖父の薫陶を受けて、深い研鑽を積み重ねたことが、そこから直ちに了解されます。

学識のみならず、有能な役人でもあった桂川さんは、その後、重用されて対馬藩の家老となります。ところが、時の藩主が前藩主の子に替えて、実子を跡継ぎにしようとしたのを、それはいけないと強く諫言します。それが藩主の逆鱗に触れて、あやうく切腹させられかけたのですが、何とかそれは許され、対馬北部の中栗栖村という寒村に十八年間も幽閉され、同地で没しました。芳洲先生のお孫さんに、こんな立派な方のいたことを、どうか記憶にとどめて

文学部の文明史的意義について（塩村）



図版 8

おいていただきたいと思えます。

先ほどのお墓はその幽閉の地の近くにあります。それはわかりにくい所で、見つけるのに難儀しました。なにせ対馬では、生きている人になかなか出会わないのですから（笑）。かろうじて、農作業をしているお婆さんを見つけ、お墓まで案内して貰いました。その方が、まるで自分の学校時代の先生みたいに「桂川先生」と言っておられたのが忘れられません。地元では今でも敬愛されていることが、しみじみわかりました。

最晩年の芳洲が手塩に掛けて育てた少年が、その期待通りに、こんな立派な人生を歩むに至る。おそらく桂川はその人生の要所で、いかに行動すべきか迷った際に、芳洲ならばどう判断するだろうか、胸の中で生き続ける芳洲に相談していたに違いないのです。

昔のことについて研究するありがたさは、関係者がその後どのようなものになるのか、少し調べたら、あたかも神の如くにわかることです。生きた人間は明日どうなるかわかったものじゃないから、恐ろしい（笑）。そして、こうこう、こういうことがあったから、こういう事績に繋がるのだなという風に、昔の人の生きた筋道が、はっきりと見えてくる時が、人文学研究の醍醐味といってよろしいでしょう。

一寸話題を変えます。私の専門は日本近世文学で、最も主要な研究対象は西鶴です。西鶴とは何ぞや、という素朴な問いには、それは天才なりと答えるほかはない。あまりにも外の作家から突出していて、いわゆる時代の申し子でもなければ、先行文学の影響も受けていない、どこから湧いてきたのかわからないというのが、天才ということですが、しかし、それでは研究者としてあまりにも忸怩なことですので、何とか創作の秘訣の一端でも見つけたいと奮闘しているところです。ただし、西鶴の活動した元禄期以前は、同時代的な巷説を収めた資料が限定的で、西鶴が何に依拠

したのか、なかなか創作のヒントとなったものが見つかからないというのが現状です。告白しますと、岩瀬文庫の全調査などという、誰も手を付けようとは思わない、阿呆なことをやり始めた動機の一つには、普通に江戸期の古書を読んでいたのでは気づかないような、西鶴に関連するネタにめぐりあいたいという助平根性もあったのです。

最近、一寸面白いものを手に入れたので、お話ししましょう。これは『武鑑物語』という元文元年（一七三六）に成った原写本——転写した本ではなくオリジナルの写本——です（図版9）。つい先月（平成二十五年六月）に行われた大阪古典会の大市で、首尾良く落札しました。武士として然るべき行動、あるいは然るべからざる行動を具体的に列記した逸話集で、どうも内容から見て越前福井藩の家中で衆議された話題を集めた本らしい。その中にこんな話がありました。

一、加藤肥後守殿城下にて、一家江三人取籠就有之、加藤殿、扈従、十八歳に成者呼、「尔、行向て可討」とあり。「畏」と答、既に罷立んとす。「暫」と、「世の中にひとりどまるものあらはもしわれかはと身をやたのまん 此歌の心を心得たるか」と御申候へば、「心得たり」と答、早速、彼家へ駈付、「此内に忝人御たすけあり」と高声によば、り欠込、三人共に無難討留しとなり。

十八歳の若武者が、機知によって三人の犯人による立て籠もり事件を解決する話です。加藤肥後守とは加藤清正、御城下とあるのは肥後熊本でしょう。「世の中に」の狂歌は、近世初期の嘶本『寒川入道筆記』に見える「世の中にひとりどまる者あらはもし我かはと頼みもやせん」の変形でしょうから、この話そのものも古い成立と考えて良さそうです。

これとよく似た話が西鶴の『新可笑記』（元禄元年刊）の巻四の三の中にあります。そちらでは、殿の上意により、立て籠もり事件の現場に向かうのは二人の武士となっています。該当する場面を引くと、

…二人、此時と申あはせ、彼内倉にかけこみ、「三人のうち、壺人は御赦免」とのかけ声、死覚悟の者ども、此ことばに命お生まれ、面々に憤をやめてしりぞくを、二人とりふせければ、残る壺人、安堵して、拔身、鞘におさめし所を異義なく取て搦めぬ。

とあります。こちらでは例の狂歌は引きませんが、その歌の内容に相応した、犯人たちの心理が描写されていますね。たぶん西鶴は、当時世の中で語られていたこんな巷説を、さらっと利用しているのです。こんなわずかな話でも判明するのは有り難く、西鶴が原拠をよく用いること、しかも、その際には変形を加えるのが常であること、という創作の特性がよくわかります。

ところで、西鶴の方では、立て籠もり事件を起こす、この三人の犯人について、

有時、中小姓三人、不断心のあふ友として、外をかまはず、見ぐるしき程、念比ねんごひにかたりしが、かゝる心ざしより家の掟をそむき、若道を好み、：

と述べています。つまり、この若者三人はふだんからとても仲の良い友だちで、外の人の見る目もかまわず、見苦しいほどに親しくしていたという。こういう指摘というか観察眼が、西鶴の鋭いところで、前近代の日本人の行動規範や美意識を知る上で参考になります。

考えてみますと、現代の学校教育でも職場でも、仲良くすることは積極的に推奨されるものの、あまりに仲良くしすぎるこの問題点の方は、言及されません。ところが、既に論語に「君子の交りは淡きこと水の如し…」などとあるように、この問題は古くより気づかれていました。特に周囲の人々に疎外感を抱かせるような、過剰な仲良しげ

ループのふるまいは、他者への配慮を欠いており、西鶴のいうように指弾されるべき問題行動であるはずです。

いつまでも跡を絶たない、自殺を引き起こすような深刻ないじめ事件も、全然無関係の人間関係から生ずるのではなく、それまでの仲良しグループによるいじめや排除が背景にあることが多いのではないのでしょうか。殊に最近のラインなどのSNSは二六時中の密着した付き合いを要求し、醜みにくの如き不適切な交わりを助長する危険性が高い。今後は、子どもたちや学生さんに「あんまり仲良くしてはいけない」というような教育も必要になってくるように思います。こんな風に古くて新しい気づきを与えてくれるのが、西鶴の魅力なのです。

ただ、そういった理念を伝えるだけでは不十分で、理解も浅い。たとえば、西鶴のような優れた文学作品を味読するのが望ましいことで、教育効果も高いと思います。さらに願わくは、一度や二度読むだけではなく、そういうものを読むことを習慣化するのが望ましく、それこそが真の教養教育なのではないでしょうか。

また脱線です。昨今の大学教育の現場では、シラバスというものを要求されます。私はこれに違和感を感じるのですが、断固拒否するというほどの豪傑でもないので、毎年しぶしぶ拵えています。ところが、最近、非常勤を頼まれた、ある大学で、提出したシラバスに対し、そういう書き方ではなく、この講義を履修したら、こういう能力や知識を獲得できるというかたちに書き直して貰いたいとだめ出しが来ました。これには呆れてしまった。

はじめに申した通り、文学部とは過去を重視する所であって、そこでの多くの時間は、死者との対話に費やされます。そして、書物や文書（あるいは絵画や器物など）を通して古人の声を正しく聞き取るとはとても難しいことなので、教師は具体的な読解の実践を通して、学生さんにその技法を見せる。学生さんはそれを見ながら、自らも実践して、その技法を盗み取る。それが望ましい文学部の講義です。シラバスのような工程表とは、本質的に相容れないも

のがある。少なくともシラバスが大学教育をよくすると、到底思われないのです。

これのみならず、近年の大学改革に関するアイデアは、どうも素人考えが多い。それでも、自分が受けた、こんな素晴らしい教育を多くの若者と共有したいという発想が根本にあるのならばよいのですが、そんな話は聞いたことがない。何か大学や教員に対する恨みを返しているような、そんな気さえするのです（笑）。不毛ですなあ。

少し頭を冷やしまして（笑）、西鶴に戻ります。多彩を誇る西鶴の諸作の中で、先ほどの『新可笑記』など、武家物と呼ばれる一連の作品群は、武士の行動規範、いわゆる武士道の問題を扱います。実は江戸期の武士の社会では、行動規範を若い世代に伝えてゆく必要があるため、折に触れて具体的な武士道譚が衆議論評された形跡があります。先ほど紹介した『武鑑物語』のような種類の書物は、そのような宮みの所産で、各地に残されています。つまり、この話題は需要がありました。西鶴はその需要に、とても高いレベルで応えているのです。西鶴は大坂の町人ですから、武士はあくまでも他者なのですが、案外武士の世界に詳しかった。それは、西鶴の終生住んでいた大坂の谷町筋東側というのが、武家地と町屋のちょうど境界線上に位置し、西鶴の祖父や父は伏見より移住してきた、武家を相手とする刀剣関係の商職人——私の推理ではたぶん刀屋——と見られることと関係があるはずですよ。

今日は具体的に詳しく解説する余裕はないのですが、西鶴から学んだ武士道の要諦を、私なりにまとめてみますと、次の三点となります。

- ① 自分はもとよりのこと、他者、殊に敗者や弱者の名誉を最大限に重んずること。
- ② 肝心要の場面では、自らの名利のために、嘘を言わないこと。
- ③ 道理を重んじ、感情や自己保身をそれに優先させないこと。

「武士道」というと、自分や他人の命を軽んずるような、とかく殺伐とした、武張ったものと思われがちで、殊に戦前にはそういった言説が横行したために誤解されやすいのですが、実は江戸時代という平和な時代に発達したものですから、最も重要なのはこのようにソフトな側面なのです。これらが武士のみならず、農も工も商も、みんなが基本的に是とした日本人の行動規範ないし美意識なのでした。

念のために、外の資料も見ておきましょう。これは、やはり岩瀬文庫で出会った『八盆豆腐』という書物です（図版10）。著者などは不明ですが、内容より見て、こちらは出羽庄内藩の家中で語られた武士道の衆議を反映した本らしい。その中にこんな一節がありました。

或老士、若き者を集て言けるは、心は快活にして撓たゆまざらん事を要す。故に人は常に大丈夫の志を養ふべし。勇たらざる者は心常こころじょうに困む。心しづまつて困む時は、生て此世に益なし。勇は、血氣を以、物と争ひ勝事をつとむるには非ず。此氣此心活して、健に泰然として能決断し、屈する事なく迷ふ事なく、天下の大変に逢ても心転動する事なきの儀也。あしく心得て物にせまるべからず。学文と云も、道を知て此心の自由を得、快活にして内転動する事なく、困むことなからんが為也。：

どうです、いいことが書いてあるでしょう。私はこれを座右の銘にしています。町を歩いていてもそうですが、大学のように浮世の塵から少しは遠い所においてさえ、苦虫をかみつぶしたような顔をしている人が多い（笑）。たいがい勇たらざるが故に、心を勞あつかしているのでしょうね。ここにも「勇は、血氣を以、物と争ひ勝事をつとむるには非ず」とちゃんと書いてある。これが、まともな武士道なのです。

かつての日本には、このような武士道という立派な美意識があったのに、明治維新以降、富国強兵のために無理な近代化を余儀なくされる中で、それをどんどん削り落とし続けてきました。たとえば、戦前の軍隊では上官が部下を殴ることが日常的に行われ、民間の学校などでも同様となりましたが、人の頭や頬を張るのは侮辱的行為の最たるもので、江戸時代にはとても嫌われました（武士道①違反）。僕が大学に入った昭和五十一年春に明るみに出たロッキード事件では、社会的な地位のある人たちが、巨額のカネの授受について「記憶にございません」を連発し、国民を唾然とさせ、その後、同じような形式論理が大手を振ってまかり通るようになりました（②違反）。最近も国際的に名の通った一流企業で、上司の命令により粉飾決算を行い、結果的に企業のみならず国の信用を地に墮としました（③違反）。職場でも学校でも、いじめ——衆を恃んで威をなす卑怯——が堂々で行われ、ストーカーやDV——腕力を持んで威をなす卑怯——も跡を絶ちません（①違反）。かつて太い鯉節のようだった武士道も、鉛筆のようにやせ細ってしまったのが現代です。

国民が、かつてあった美意識をわずかでも再認識——つまり①②③に反した行為をそれと認定した上できちんとして軽蔑することです——するならば、家庭も学校も職場も地域社会も少しは平和になる。企業も信頼され、国政もまともになる。そして国際社会における日本の立場も同様で、武力に頼らずに安全が確保されるようになる——日本人は肝腎の場面では嘘を言わないという定評が確立されたら領土問題など一発で解消です——。そのように思うのですが、あまりにも楽観的に過ぎるでしょうか。しかし、現代の混迷を解決する方策が、外に何かあり得ましようか。

その一方で、元禄の昔から指摘されている日本人の弱点もあるので、そのお話をおきます。これまた岩瀬文庫で出会った本から教えられました。それは西鶴と同時代に京都で活躍した朱子学者、藤井懶斎（らんさい）（一六二八〜一七〇九）

の書いた漢文体の写本随筆『睡餘録』です。その中に次のようがありました。私に読み下しておきます。

世人、恒に言ふ、人の勇悍なるは中華四夷、なんぞ本邦に及ばんと。竊かに惟ふに、未だ必ずしも尽く然らず。各長ずる処有り。若し夫れ関を斬り旗を奪ひ、死地に入り先登すれば、則ち中華人、固よりまさに本邦人に及ばざるべし。是を以て中華人を視れば、あたかも嬰孩（あかご）のごとし。その閩主に直諫し、権臣を面折するに至りては、鼎鑊（釜ゆで）を觀ること、蔗飴（水あめ）の如し。則ち中華人、尤も愈れり。是を以て本邦人を視れば、顧つて婦女のごとし。

不適切な君主や重臣に対して、面と向かつて諫め批判することが、真の勇氣であつて、歴史を見れば、中国人に比べて、日本人はその点で劣っていると云つてゐる。今こそ、われわれの一人一人が拳々服膺すべき言葉だと思つたのです。が、いかがでしょうか。先にお示しした武士道の三原則のうち、③道理を重んじ、感情や自己保身をそれに優先させないことというのは、実はこのことなのですが、実際の局面では難しく、だからこそ普段から弱点として意識しておくことが肝要ということです。それから、根拠のないナショナリズムへの批判となつてゐる点でも、これは見識のある発言ですね。

今から百年ちよつと前の明治四十四年八月、和歌山で夏目漱石が「現代日本の開化」という有名な講演をしています。そこでは、

西洋の開化は内発的であつて、日本の現代の開化は外発的である。…今の日本の開化は地道にのそりのそりと歩くのではなくつて、ヤツと気合を懸けてはびよびよいと飛んで行くのである。…吾々の開化が機械的に変化を余儀なくされるためにただ上皮を滑つて行き、また滑るまいと思つて踏張るために神経衰弱になるとすれば、ど

うも日本人は気の毒と言わんか憐れと言わんか、誠に言語道断の窮状に陥ったものであります。…とにかく私の解剖した事が本当のところだとすれば我々は日本の将来というものについてどうしても悲観したくなるのであります。外国人に対して乃公の国には富士山があるというような馬鹿は今日あまり云わないようだが、戦争以後一等国になったんだという高慢な声は随所に聞くようである。なかなか気楽な見方をすればできるものだと思います。

と語っています。このように漱石は日本の開化、つまり近代化を根本的な悲劇だととらえ、何の処方箋を与えることもなく、ただただ嘆いている。これがまともな知性のあり方です。しかも、この講演が、日清と日露の戦勝を経て間もない時点でなされたことに留意すべきでしょう。その後、漱石の憂えた日本の窮状は解消されるわけではなく、ますます深化します。その行き着く先が、日本の歴史上、最大最悪の災厄である一九四五なのです。そして、残念ながら、その窮状は現在にまで連なり、その一つの顕れが三・一一——もちろん人災の方です——なのでした。何を申し上げたいかというと、明治維新以降の近代化を、そろそろきちんと見直す必要があるということです。そのためには、人文学の蓄積した叡智を必ず参照しないとイケない。つまり、今こそ文学部の出番なのです。

最後に、文学部のなすべき仕事について、あらためてまとめておきます。人間というものは、同時代の論理だけで生き、同時代の本だけを読んでいたのでは、気づかないことが多い。幸い日本は「書物の国」で、先人の努力のおかげでたくさんの智慧が書き残された。それをまず、きちんと読むことこそが文学部の仕事です。

ただし、それは簡単じゃない。文字の問題、言葉の問題、文脈の背景にある世界観の変化の問題など、誤読をもたらす要因がたくさんにある。それらの問題を乗り越えるためには、たくさん参考資料を見ないといけない。あらゆる

る文脈の可能性を吟味し尽くさないといけない。そのためにはいろんな人生、ものの考え方に對する想像力を身に付けないといけない。

さらに、どのような人生が、その作品を生み出したのかを知るために、作家の伝記資料にもこだわりたい。純粹にテキスト（本文）だけを読むのは実りが薄いものです。

そして何よりも「書物」にこだわるのが要求される。古典は原典が残らないのが通例です。書物は基本的に複製物ながら、現存する書物間にある微妙な差異を比較することに、書物を読み解く重要なカギが潜んでいることが多いからです。

以上を要するに、昔の人が考えや思いを残した「書物」を、少しでも正確に読み取ること、そこから得た知見を公表して「書物」に新たな価値を与えてゆくこと。そんな仕事を、教員と学生とが同じ方向を向いて、一緒に切磋琢磨する所、それが文学部なのだと思います。しばらくの間、逆風の時代が続くかもしれませんが、文学部の同志として、皆さん、ともにがんばりましょう。

（しおむら こう・名古屋大学大学院文学研究科・日本文学）